



監督＝蛭川幸雄／出演＝唐沢寿明／小雪／椎名桔平／香川照之／池内博之（東宝配給／2003年日本映画／128分）

四谷怪談をアレンジした京極夏彦の原作を、蛭川幸雄監督が映画化。顔の右半分を醜くメーキャップしたお岩に扮するのは、何と美人女優の小雪。芸達者な脇役陣と美しい映像で、男と女の究極の愛とエロティシズムを描いているが、果たしてどこまで成功したのか……？

## 🎬「四谷怪談」をアレンジした原作

有名な「お岩さん」が出てくる「四谷怪談」は、恐ろしいお話。顔が崩れて恐ろしい形相となったお岩さんのイメージは子供の時に映画で観たが今でもよく覚えている。またラジオの講談などでも何度も聴いたことがある。「四谷怪談」の基本的ストーリーは、「浪人の民谷伊右衛門を、お梅という良家の娘が好きになる。伊右衛門にはお岩という女房がいたが、自らの立身出世のため毒を飲ませ、お岩は顔を醜く崩し死んでいく。お岩は恨みを晴らすべく亡霊となって現れ、数々の惨劇を引き起こす」というものだが、この映画はそれとは全く違う解釈で書き下ろした京極夏彦氏の原作『囃う伊右衛門』にもとづくもの。

## 🎬伊右衛門のパーソナリティは？

境野伊右衛門（唐沢寿明）は、切腹を命ぜられた父親の介錯をした後、浪人に身を落としたが、寡黙で生真面目。そして「笑うことを知らない男」という設定。そんな伊右衛門は一人娘のお岩のいる民谷家に婿入りする。心を開かない岩に最

初はイライラするものの、次第に深く愛するように。しかし伊藤喜兵衛（椎名桔平）の奸計によって離別させられ、伊藤の愛人とそのお腹の子供まで押しつけられる始末。伊右衛門はそれらの仕打ちに耐えて民谷家を守ろうとするが……。

## 主役のお岩さんは小雪

お岩さんの顔が崩れたのは、疱瘡を患ったため。幸い一命は取りとめたものの、顔の右半分が崩れ、化け物のようになるが、もともと気の強い岩はそれでも1人強く生きていた。しかし弱みを見せない気丈な岩を世間は心よく見ていなかった。お岩さんに扮するのは、今が旬の女優の小雪。顔の右半分に特殊な酷いメーキャップをし、右目にホワイトアウトという特殊なコンタクトを入れた顔はたしかに異様で、美人女優がこの役になりきるのはかなりきついと思うが、そこはさすがプロ。立派にお岩さんになりきり、すばらしい演技を見せている。

## 悪役は似合わない椎名桔平と達者な脇役陣

悪役は筆頭与力の伊藤喜兵衛。金をバックに権力を握った人物で、女癖が悪く、放蕩三昧の生活をしている。病気を患う前に想いを寄せていたお岩が、伊右衛門と仲の良い夫婦となっていることが気に入らず、伊藤は一計を。岩を伊右衛門と離別させたうえ、伊右衛門には自分の愛人のお梅とその腹の子を押し付けた。この、根性の曲がったワルの与力を椎名桔平が演じているが、ハンサム役者の椎名桔平にはどうも悪役は似合わないようで、そのワル振り（？）がピンとこない。もっと顔つきからしてワルの役者を起用した方がよかったのでは……？

お岩と伊右衛門を結びつけたヘンな坊主（御行乞食）役の又市には香川照之、また伊藤に妹を殺され、伊藤への復讐心を燃やし続ける直助には池内博之など、脇役陣はいずれも芸達者を集めて面白い。貧しい長屋での生活ぶりは現実感があるし、ストーリー展開にこれらの脇役陣の果たす役割が大きいため、その演技の充実ぶりが光っている。

## テーマは2人の究極の愛

又市のとりもつ縁で民谷家へ婿入りした伊右衛門とこれを受け入れた岩の夫婦

仲は当初はギクシャクしていたが、伊右衛門の優しさを知った岩は本心から伊右衛門を愛しはじめた。この岩の心の動きの過程は実によく分かる。

したがって、伊右衛門のためと信じて自ら身を引いた岩が、「真相」を知った時のショックは精神に異常をきたすほど大きいものだった。「うらめしや、伊右衛門殿」と唱えながら伊右衛門の前に現れるお岩の悲しみと美しさ(?)は、小雪の真に迫った演技もあり、十分迫力がある。

しかし他方、伊右衛門が岩を想う気持ちは少しわかりにくい。伊藤からのひどい仕打ちに耐えている伊右衛門の内面は、最後にはすべて吐き出されて、わかるものの、ストーリー展開の途中では、少しわかりづらいのが難点……?

### ヘビとネズミはどうも……

夫婦ゲンカをしていた伊右衛門と岩が仲直りして、抱き合おうとした時に登場してくるのが一匹のヘビ。岩はこれをつまみあげてヒョイと庭に放り投げますが、極端にヘビが嫌いな私にはちょっと違和感が……。さらに、じっと座って伊藤がくるのを待つ伊右衛門の家の中で、チョロチョロ動くのがネズミ。ネズミも私は大嫌い。このように「チョイ役」で登場したはずのヘビとネズミが、ハイライトシーンでは大きな役割を果たすことに……。したがって私は思わずそのシーンでは目をそむけてしまった。パンフレットで「究極のエロティシズム」と表現されている最後の見せ場なのだが、どうも私はヘビやネズミの大軍を登場させたり、ミイラのような伊右衛門とお岩を登場させるシーンは好きになれない。せっかくの美男、美女の愛の物語が少しグロテスクになり過ぎているのでは……?

### ストーリーの深みと映像の美しさはさすが

全体的に物語はスローテンポで、1つ1つの場面を実に丁寧に撮っており、非常にオーソドックスなもの。役者のセリフもはっきりしており、好感が持てる。

また特筆すべきは映像の美しさ。全体的に暗いシーンが多く、渋い色彩で構成されているが、さすが蜷川幸雄監督の作品と感心。

2003(平成15)年12月16日記